

女の会通信

No. 18

特集号

816.30

長崎・行動を起こしたい女の会 事務局 七二一四三四八
通信編集局・長崎市中國町四一十七 四四一八四二

今回の通信は、六月七日におこなった田中美津さんの講座に参加しての感想文特集にしました。書意始終母や親など豪華な母の逸話がないという人が多かったのですが、メ切に間に合った分全部を掲載しました。なお、参加できなかった方には、講演のテープがありますので、事務局までご連絡をいただければ貸し出しをいたします。

私らしくカっぱい生きること

A・U

前々から楽しみにしていた田中さんの講演、子供の病気で半分しか聞けずとても残念でしたが、やはり楽しみにしていたとおり、田中さんらしくカっぱい、ばいに生きてきた過程がポンポンと弾むような話術と共に私の中にとびこんできました。

「ウーマンリブの闘士」というより精いっぱい生きていく女として、心にとびこむものがありました。まず、自分の个体史をああもあから様にさらけ出し、逃げる所を自分の手

でひとつひとつこわしながら、自分らしく生きることに取り組むこと。そしてその生き生きとしていることの素晴らしさ。さらに強さをもちます。

自分を認識することからその事はぼじまります。どの様に生きていくのか!というのは難しい問題ですが、今までそして今、どの様に生きていくかは、よく思い出し考えれば判ることです。その事を特に避けていることはないのですが、何気なくすごしてしまうことが多いのではないのでしょうか。男との関り、子供との関り、社会との関り、私をとりまく様々な関係性の中で、私は私らしくあったのでしょうか。私は、私らしく生きたいと思いつつも、作られている——あるいは作っている自分に気づき、ドキッとすることがあります。そのことはいかにも当たり前のようにあるので、仮面であるかどうか本当にわかった時は愕然とした気持ちになるのです。なにより恐いのは仮面の自分が素顔の自分だと錯覚し、自分を見失ってしまうことです。

常日頃、気をつけていたつもりでも、田中さんの話を聞いて、あらためて自分をみつめなおし、取り戻さねば!!と思つたのです。

もうひとつ、私になかなかできない事をみつめました。

それは、Yes・Noをはっきりすることです。日本の文化はあいまいさの中でいきづいてきましたが、そのことが自分自身の立場(生きていく場所)をもあいまいにしていく様です。必要な時に「できる・できない」「Yes・No」をはっきりと言えるということは、自分の生き方を他人に表明することになるようです。このことは簡単な様で、そうでないことのひとつです。

そして最後に、私自身の「言葉」をみつげ出すことです。押し寄せの、どっからか拾いあつめてきたきまり文句ではなしに、生きてきた実感と共にどってくる言葉。それは、各々顔がちがうように十人十色あるでしょう。その中から、私は私の言葉をもって話していきたいと思いました。それには、逃げ場があつては作れないのかもしれません。他人の中に同化されてしまつては行き様もありませんから、逃げ場を作らないという息がつかまつてしまうような気持ち

ます。けれどこの一線だけははずれない。この一線が破れる時、私は私として生きているのではなくなる。それだけ固執する一線があつていいと思います。

私には、どのように生きるのだ!!という命題はまだわかつていません。ただ、いつも素顔の自分で生きたいと思つています。素顔でいれるためには変えて(←反対して)いかなければいけないことがとても多々あります。とりまぐ様々な呪縛から解放されるために、まず足もとを見直しています。他人の足を踏みつけて気がかずにいるのではないか。踏まれて痛いと言えずにいるのではないか。私が私らしく力いっぱい生きるために、素顔の私であるために、生きてきた過程を見直し、自身をみつげだしている今日、この頃です。

講演をきいて

松山 宏子

私はかなり窮屈な思いで田中さんの話を聞いていた。彼女の話には違和感があるのではなく、今までの自分史の中でいうほんこだわつてきた事であるにもかかわらず、目をそむけてきたことへの自分への云い訳で、たぶん、どきまぎしていたのだろう。

昔はもつとひどかった。小さい時から内向的であった私は、自分のことばをのみこんでしまう癖がある。そしていつも自分へのジレンマとして残ってきた。おかしくもないのに笑ってしまつて、顔がひきつってしまふことが、たびたびあつたようだ。そんな私にとって「自分らしく生きてゆく」ことは一つの憧れであり、自分らしく生きてゆく人

私は自分らしく生きてゆくとしていた。私に出逢う機会が多くあつた。そして、彼女たちの生の鼓動をすぐそばで聞いていたのに。小さく息をしている私の存在は、彼女たちにはとても気がかり(批判的)にも思つたろうと思つた。

女の会の集まりは居ここのいい場である。まだ、ことばをのみこむ事があつても、自分らしくなれる空間であると思つている。とり乱されて、疲れて帰ることがたびたびあるけれども、今の私にとってはいいことだと思つている。同じことを書いてしまふが、仕事や家での生活(夫・子供二人)友人や知人との関係、もつとひくくるめていうと社会秩序に対して、私は強迫観念が先にきて、「これじゃ

いやだ」「絶対に耐えられない」となつてしまふ。じゃ私はどうするかという時、こここのところで自分の折り目をつけてきていない。ただ背を向けて生きてきたのだらうと思つた。

夫とのやりとりの中で「じゃ、どうすればよいのか」「具体的にどうしてくれ」と云わなければわからない」と迫られることがたびたびある。いつも私は「私が今話したことを考えてほしいのだ」といつて話は終つてしまふ。これでもいいのだと今までは思つてきた。逃げたいという思いと一緒に生きてゆきたいという思いと同居する中で、私は彼に回答を迫り、そんな夫に回答をだすまではと背を向けていたようだ。私はこうしたいのだとぶつつけることもなしに、ギスギスした関係をひきずつてきている。

「空いっばい」に空であり、海いっばいに海であるという事は、田中さんが自分史を語る中で、私にとっては相当な説得力をもつて響いてきたし、様々に差別を生み出す社会の中で「なんで自分の頭にだけ石があつたのか」と考え始めている人たちにとって、一人がその人らしく生きるという事、そして、共に生きるという事を、問い

なおしてくれたいと思っています。

田中美津さんに会って

T.M.

「いのちの女たちへ」を読んで感激して、私の心の中に、田中美津という女の人をすっと思いついていました。その後マスコミでも噂を聞かないし、「どっ」しているのたろう、

あの田中さんは」と感じて時々思い出していました。

それが今度女の会の講演会に来るといふ事になり、実際はどんな人で、今何をしているのかと期待をしていました。

話を聞きに行くといふ彼女は小柄な体で全身でもって私達に、今までの生き様を語りかけてくれました。「いのちの女たちへ」の中の彼女が、そのまま息づいているさまに、再度本を読んだ時の感激が呼び起こされ、又彼女をとて身近な人を感じました。

メキシコでの生活はまるで映画をみている様で面白く、

又、彼女のとり乱しぶりが感じられました。同じ人間でも環境によって全然違っているし、日本という国の中での、人間のせせこましさを痛感しました。日本人は悩んでいる割に現実に対するキチンとした対応がないという、彼女の意見は、まさに私自身に向けられた言葉の様に思いました。

私自身いろんな「しがらみ」に取り囲まれているけれど、

それは日本を離れてみれば解決できる程の、小さな取る

に足りない事で、自分の生き方を考える上では、あまり問題ではないと、もう一度ゼロからの出発をしてみようという気がしてきました。

子供への彼女の関りも、思った通りに素適なものでした。

「子供を育てるとは、人生をもう一度ふり返る事だ」という言葉の中に、彼女の子供に対する愛情と、それから養育する人間への出会いの希求が感じられました。私自身、子供は可愛いし、成長につれての新鮮な喜びを感じてはいたが、自分の体力と時間と、子供の本能におもむくままの行動とが、せり合っている様な毎日でした。その日一日が聚でさえあれば、ホッとする様な消極的な子供への対応だったなと考えさせられました。そして、もつと大らかな気持ちで子供に持っていくこうと考えさせられました。

人間の悪徳の中での真実味に表われるべく、生きたい様に生きればよいという彼女の生き様を聞いて、私自分も更ながら、私の生き方は自分で切り開こうという熱い思いに
めいすこ、ま、こ

講演をきいて

I・K

自分自身に「すてきた」といえるように生きられたら。
自分自身をほんとうに知り、そこから私の生きる心が始まる。田中美津さんの講演を聞いて、彼女が何を言いたかったのか、私なりに少しは感じたつもりである。

しかし、彼女の語は、私には「私はこう生きている」というよりは、「こう生きたい」というように聞こえた。それは私自身の感覚でしか彼女の語を聞けなかったということだろう。リブの旗上げをした時ですら、年令を一オ若くしていた彼女が、メキシコでの生活の中から、本当に自分自身をつかまえたような、それまで自分自身を縛っていたものが何であるかがわかるような、そんな生活であったからこそ、自分自身を養ってきたのではないだろうか。

私はいったい何者なのか。何をしたいのか。どう生きているのか。どう生きようとしているのか。そういうことを考える時、いつも思うのは、今の私の生活が何とあいまいなものだろうかということだ。一日の大半を職場で過ごし、組合活動にも無関心ではいられず、執行委員を数年やり、その中で、「こんな労働組合でいいのか」と思い、いち組

合員に戻り、職場集会の中でミソリの労働者として発言して、二コクと考えて二年目になる。しかし、ほうとうに真面目に考えている人間が何人いるのか疑問に思う時がほとんど。労組の役員になることを出世の糸口にしようと考えている人、目先の利益だけを動いている人、他から何落と事によつて自分の地位を確保しようとする人の多いこと。上つづらの調子だけを合わせて満足気な人。私がしていることはお笑いぐさだと思いつつながら、こんな職場ですらと働かなければならぬなんて「あんまりじゃないか」とついつい思い、またがんばってしまう。そんな毎日だ。

家へ帰ると、ひとりの三十一オ。ずうっと独身。ニDKのアパートに住み、世間並みの電化製品もそろえ、安い給料ながらも食べる心配のない生活。若干気になることといえ、持病があることと、七十オと六十三オになる両親が他県でふたりきりで暮らしていることである。私自身も楽な生活をしているが、それが私の選びとった生活というよりも、なりゆきであることを思わずにはいられない。学校を卒業して長崎で暮らしているのも、私自身が決めたことであるが、とりあえずこうしてみようと思っただけで、

自分の生き方など深く考えた訳ではない。ひとりの男と
長年つきあってるが、それも何となくの範囲を越えてい
ない。まわりの人は、私たちの長すぎた春を不思議な目で
見ているかも知れない。このまま何となく、何かず離れず
のつきあいを続けるよりは、一緒に暮らすか、別れるかと
相手の男に迫ったこともあったけど、どちらかに決めると
いう気持ちになれずそのままの状態である。自分でどちらか
と選びとらざるを得ない状況を、自分自身でつくり出すこ
とを思っているのかもしれない。

三十一年生きてきて、自分自身ととりつくろうことなく、
一時的にも、燃焼したという覚えがあるだろうか。正直い
ってないと思う。何かにかりたてられてという感じがな
った。全くなかったとは思わないが、その時でも、ためた
ほかの自分が別にいたような気がする。田中さんが「握っ
ている米が餅になる」といわれたが、たとえ餅になったと
しても、私の餅は食べられる代物かどうか。私にわかるこ
とは今のままでは餅なんかできるはずはないということと、
現在の自分をほんとうに何者なのか見極めないと、何を確
っていいのかさえわからないということだ。

「空いっばいに空であり、海いっばいに海でありたい」と
いう思いは同じものでも、この三十一年間の私から脱出
しないと、虚しいあがきばかりが続いてしまう。まず自分
を見つけること。それだけはよくわかってるのだが。

講演をきいていて、すごいなあと感じたり、ほんとう
にそうなのかなあと思ったり、ひきずりこまれるような魅
力を感じたり、反発も感じたり。でも、何か確かな手ごた
えを私に残してくれた人だった。少なくとも「彼女自身の
存在感」を感じさせた。「生きる」とはああいふことなの
だ。



田中美津は私運とは生活圏を異にする。彼女は首都圏の人であつて、よく言うところの、「東京に居れば誰だつてやれるぞ」の類である。逆に言うなら、私運地方に住む者は、本當に地道な運動ができるということである。田中美津は今も昔も自分自身の中にある都会人の殻から抜け出せないでいる。そしてそのオロカシサに気付かずやつて行ける辺りは、彼女自身の厚顔のなせる技としか言いようがない。「私は小ニの頃従業員の方にイタズラされ、そのことは私のみにくいアザとなり、私はハオの大人になつた」と、そのことだけを錦の御旗にかかげ、それにへばりついて、彼女がなりたて、行動を起こした。行動を起こせばそれで良いのか？、がなりたてればそれで良いのか？、自ら食うことをせず、プチブル／＼と居直つて、それで何か出さなければ、当人にとつては結構なことであらうが、その昔言葉遊びの好きな連中が集まつて彼女をまつり上げた事は私運女にとって、かなりの損失だつたように思う。「身障者達がどこからともなく集まつてくる光景は、何とも言え

ず無意味でゾツとする。何でこんな所に、のこのこと出て来るのか」と言いたい。」と彼女が言うのは、あえてのことだと解るけれども、そこまであえて言うなら、ミロのビーナスがモナリザが知らないが「ペンキをかけたのは私の友人なんだけじ」と愚にもつかない行動をひけらかすヒマがあつたのなら、当日の講演会に、一人すらも身障者が出席していない現象を、ひとこと論ずるべきである。現実はそのなにお遊びの運動では何も解決しえない。彼女は言葉をあやふり問題にすり変えてきた、と私は思う。ある時は個人主義の女に、ある時は、革命兵士にと、まるで又エのように彼女は姿を変えろ。永田洋子の事が話に出たが、永田が遠山美枝子へだつたと思つたに夜空を仰いで果てしない夢を語つた時、ヒナトホクセイという言葉で遠山が固まることが、「北斗七星のことでしょうか？」と言つたらば、「革命後の新しい中国では、あの星座をヒナトホクセイと言つたのだよ」とたしなめられた。遠山は変だと思ひながら、そうなのかと思ひ直した。という話を何かで読んだけど、話の真意は別としても、田中美津の話を聞いていると永田洋子のこの話が思ひ浮かんできた。そこへもつてきて彼女

の永田洋子批判である。ここでもし、二人が出くわすならば（過去には出くわしたのほう）、「抱かれる女」としてのプチブル性がどうのこうの、から始まって、「何ぞこのドブス」「男に抱かれたいんだろいなど」と罵詈雑言のあげく、永田が田中美津の髪を引っ張りゲバルトが開始される。そして永田の勝利。「ヒヤフシヨウには勝てないワ、所詮私はプチブル。それに体も弱い……」と、はきすてるように田中。ここら辺りが私の持つている、二人に対するのホンネのイメージである。話が下衆的にそれとしまつたが、彼女は何度も本音という言葉を使い、また、人間生活には悪徳も必要だ、とも言っていた。悪徳とは何か？（後の座談会で、あなたは悪徳にふり回されている。私がいづのは日常的な悪徳である。と全くわけの解らない答え方をされたのだけ……）一体、遊びの精神も必要だなどという言葉の中には、体の良いごまかしがひそんでいる。人が悟り得ない限り、何らかの矛盾や欺瞞を心底に持っているのである。それをあえて言葉に出し肯定することは、何かとてつもなくエスカレートさせることになるのではなからうか？ 私には若い頃感情のおもむくままに引きまわら

やったことがある（私だけでなく多数の人が何らかの経験を持つのではないかと思ふのだけ）。私にとってこれらの行為は、スリルを果しむ程度の快楽でしかなかった。しかし、学生運動をしていたある女は、自分が国鉄でキセル乗車した行為を「国鉄は我々が打倒しようとするところの国家権力云々」だからして私がキセルすることの意義は人民にとつて……（言葉がむずかしくて理解しがたい）」と正当化しようとしたのだ。しかしホンネは別にあつた。彼女が共同体がうまくいかなかつた原因について、器が大きければ問題はなかつたと答えるあたりはキセル乗車とさして変わらない。ただただ女史の詭弁におそれるばかり。

私達は彼女から様々なことを学んだ。私の頭の中には、「相手の思フクと氣にするあまり言いたいことが言えない日本人」という言葉が残っている、あの日私はまさに日本人であつた、聴衆を圧倒したつもりでいる彼女が誰も何も言わないんですか？と問うのにムカツとして「何も言うことないけど子供が心配」と言った言葉は、全く足りなくて、「そうあんなのでいいのよね」と解釈されてしまつた。「皆さん、こんなクサイ内容の歌を、ヘタクソが、

しかもリズムもなしに唱うのには堪えられません。せめて拍手でごまかしまし「うう」と言うべきであった。惜!!



田中美津さんに

M・M

私はあなたの講演会を聞いた直後の交流会で「十年前に書かれた」とり乱しウーマンリブ」と今日の講演会がつかうかない。東洋思想とどうか仏陀の影響をたいぶ受けているんですね」と傲慢にもそんな風なことを言った者です。あれから二日後の女の会反響会までずっと内容を復元しては何回も反すつしました。そんなことぐらいはさぞ知っていたと言わんばかりにしゃべってしまった自分にすくひっかかりを覚えましたから。講演が後半にはいり、宇宙にお

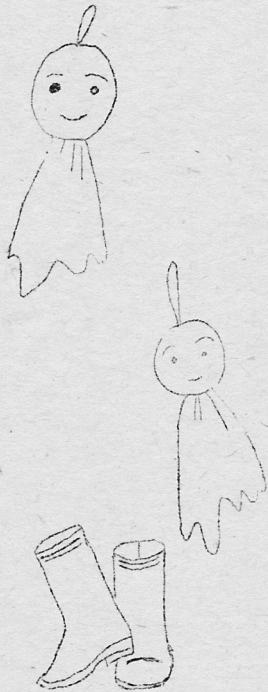
ける自然界と人間の結びつきを語られた時（以前私はその教えに深く感動し、ある時期と救われたことがあったから）ああ私と同じだと素直に感激しながら、一方では何でウーマンリブの一人者と呼ばれる彼女ともあろうう人が私みたいな日和つた人と一緒にいるんだろくど反発しあっています。初めとその教えを知った時、感動したと言つたのはばかッている私も居た）しかし気がついたのです。私が仏陀の教えを知って頭で感動したのと、あなたがメキシコでタンポポの花に心慰められたのとは雲泥の差があるのだと。私にとってその場限りのきらめいた語句は色あせて忘れ去られようとしているのに、あなたには血肉となって息づいている。同結論であつてもそれに到達するプロセスが違つとかかなりひらきがでてくるのだと。

私は今まで女の会で本音を語るのに回苦八苦していたような気がします。それは彼女達と日常生活を重ねていないし、中途からこの会に飛びこんだ私はまったく過去に unfamiliar を持っていないので、とにかく女の会でウケルようなことしか言つてこなかった。私の目の前に映る彼女達ははるかに自立して見えました（たぶんそうだろうと思つ）。

一年前出産。首見ノイローゼ気味で子育てをやっている中で、やっぱりあの人達とは違ふと考えました。彼女達は取り乱すことなく、立派に着々と子育てをやり、其稼ぎを稼いでいるのに対して、私の思い描いていた出産、首見はカタカタに崩れていきました。(現在も立ち直っていない) 教々の本音のオンパレード。我が子だけは……。障害児にはなつて欲しくない。無意識に子供を競争社会に置いていたり、強者と弱者の関係で子供を管理していたり……。子供も含めて自分も生きるなんて言っていた自分がチャンチャフオカシク涙がでてきました。そのあたりを彼女らばかりよく乗り切つて生きていた。悩んでいくうちに、前から感じていた羅網が広がつてきました。私は何となく彼女らと生きていく上でタイプが違つのではないかと。(私は本当に小市民的な人間だと認識している)

そんな時にあなたの講演を聞いたのです。濁った池の中に石を落とさせてますます混乱しています。交流会の夕食時に、御飯を食べずスイカをパクついている息子の口に、あなたは巧みにニンジンと放りこんでいたし、「海は海いっぱいに海であり、空は空いっぱいに空でありたい」とい

う言葉に心打たれたと語つた。(こんなことを書くなんて私はまだまだリブに偏見を持つているのでしょうか) でもたぶん生き方が違ふというより、私は大ゴミの日にゴミの区別をいい加減にして出す人だからだろうと思えるのです。これと重なつて交流会で「自立とは両親、夫、子供、何にもないところでも一人で生きていけることだ」と言われましたが、それに同感しながらも、子供はともかくとして夫なしでは私は生きられそうにもありません。たぶんこの二点が私をダメな女にしているのだろうと思います。絶えず自己からの解放をしたいと願つている私にとって、田中さんの迷いながらも徹底的に生き抜いている生き様は勇気を与えてくれました。特別な女ではない、ごく身近な女の人(しかも首見ノイローゼになつたといわれる)だつたということが……。



講演会に参加して

M M

「いのちの女たちへ」を読んだ数年前の正直な感想は、何と怖い人だろう。自分かもしこの人のそばにいたら、甘ったれるな！とまらがないな！とつぶつぶとつぶつぶと思つた。しかしそういう甘い甘い自分であることも、少くとも現在の

私はその甘さをかかえて生きていくしかないと思つた。自分自身がその甘さをなんとかしたいという高面にぶちあたらない限り、頭の中ぐいくら何と甘いこれであることかと思つてみてはじまらないと思つたが、それがずっとひつかかつたままだったのも事実だった。そして一番忘れられない強烈だった言葉は「わかつてもらうと思つては乞食の心」だった。私が自分を女だと認識した日、つまり男を認識した日か、私はずっつと自分の惚れた男に私をわかつてもらいたいと祈るような気持ちで生きてきた。まさにわかつてもらいたいのである。当然の事ながら、いつも被害者的になり、追っかける側にはかりたたまわらざるを得ない自分を嘆きのろい、つまるところは私の一番痛かったと

ころの穴落した容姿のせいにしてしまった。もうちよつといい顔に生まれていたら、こんな目にあわなくてもすんだのではないかと思つにつけ、いい顔もつて生まれて来、祭なレールの上を走つていく（少くとも私よりは）女たちに持てる限りの憎悪をむけていた。

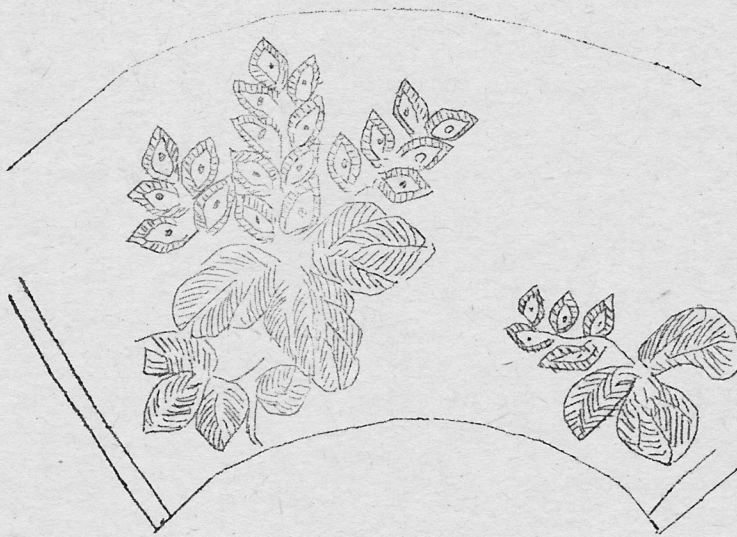
女の会で個々の女たちとの交流が始まる中で、私がいとこ歩いてるじゃないかと思つてた女たちすら、様々な形で私と似たような穴落感を持つて生きてきたのだと初めて認識した。もちろんだからといつて私の持つてきた痛みと同じとは言えないし、それで、それがわかつたからといつて私の持つてきた痛みが消えてなくなる類の代物であるとも思わなかつたけれども、ようやく、今まで分断されてきた女たちが初めて手をつなぎたいといふ欲求を持ちつる段階まで来たのでないかと思ひ、女の会の輪がずつとずつと広がり、中味も深まることを心から願つた。

しかし本を読んだときの強烈な印象も、今思えばまだ判然としてなかつたなあと思ふ。何かにつけ決まり文句のように「わかつてもらうと思つては乞食の心」ととなえながら暮していたある時期があつて、それでもそのことの中味

を正確にはつかんでいなかった。けれども私をいやおうな
く引きつける力がそのことばにはあって、いつか知りた
いという思いがあった。ごくごく最近になって、ある男との
かわりの中で、「それでも私は私よ、認めるの認めない
の」とつきつけることのできる自分を発見していく中から
、はじめであ、こういうことだったのではないかと気づき
かけている私である。でもまだまだ相手の心臓にアサリと
届くほどにはつきつけたことがなくて、それをしたくまウ
ズズしている私である。よくよく考えてみれば相手に気
にいられたいがために無意識に気を使い、つきあい始めれ
ば楽しいどころかその倍くらい重圧を感じ、それがゆえ
につきあいを楽しめなくなり、相手をせめる、いやになつ
て男ははなれていく、のくり返した。だ。

今は男の前で、昔より自由に言いたいことが言え、また
ふるまえる自分が楽しくてしかたがない。こっちは本物の
自分だったんだなど思える。もちろんまだ、まだ、そう急には
昔の後遺症は消えないけれども、同じ楽しむならめいっば
い楽しくつきあいたい私だ。中途はんばな楽しさではなく
貪欲にめいっばい。そしてめいっばい楽しもつとすること

を阻むものが当面の私の敵だ。ただ粉砕あるのみ。
ほんとうに田中美津さんの講演の中のことばにあったよ
うに、空いっばいに空があり海いっばいに海があるとい
う生き方、そして自分いっばいに自分である私になりたい。
そして自分のしたこと、責任のとれる女になりたいと思
う。それこそ、水もしたたるいい女だと思う。決して外見で
はなく、そして、そして……いい男に会いたい。



田中美津さんの講演を聞いて

I S

田中美津さんのことは、講演があると聞くまで、どんな人で、何をされたのが全く知らなかった。名前を知ってからも、講演を聞きに行くまでには、私自身、仕事におわれていたため、彼女の出した本を読むこともなく講演にのぞんだ。知らなかったことが幸いしたのが、それとも彼女の話し方が魅力的だったのか、とにかく彼女の話し一つ一つのこと、講演中は、ずし、と私の心の中に、ピンピンはいつてきた。中でも、一番私が興味をひいたのは、幼少期に受けた、心の痛み。のために、かなり長い間、自虐的で暗い性格であった彼女が、その痛みをじっくり見すえて、それと立ち向かうことで、現在のようにな。明かなくて、まさしく美津さんに変えていった、その生きざまであった。ク

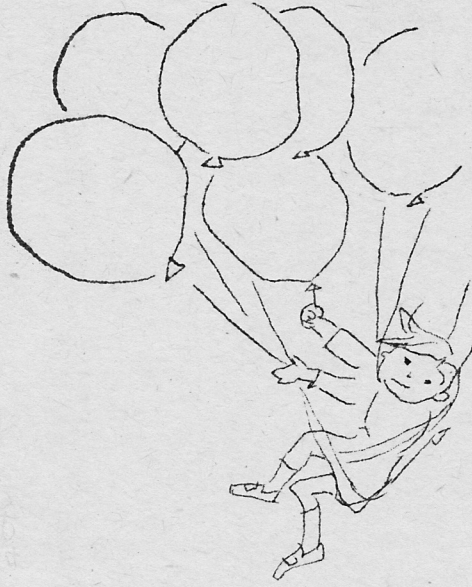
オの時に受けた心の痛みのために、女としての、しいていえば人間としての、この世での存在価値を見失ってしまつた彼女は、リズム運動を通して先ず、自分で女ということを選び直したと言う。他人のイメージ（男女を問わない）にあつては、自ら自身が主体的に選

びとる女に変わっていったという彼女も、頭の中では「自分は主体的な存在なんだ」と思つてみても、実際の行動の面では、まだまだ自分自身に対する抑圧が、かまりのと、うで残っていたという。（幼少期の痛みは、そう簡単に彼女を解放しなかつたのだ。）そんな彼女を完全に自由な存在にさせたのは、メキシコ滞在だったそうだ。

他人の鬼惑などが全くかまわぬ、自分の欲求に貪欲なメキシコ男との生活が、今まで、ど、か、で、他人の目を気にして、縮まっていた自分のあつた彼女と、すっかり変わらせてしまった。強烈な自我の襲撃に対しては、自分のみでくねなど、気にしていられたに違いない。それ、そ、なりふりかまわず抗争しなくては、自分の存在価値云々といった、あま、ちよろい、観念的なものではなく、存在そのもの（生命）の危険性を感じたのかもしれない。とにかく、メキシコの自由な風土もあいまつて、メキシコ滞在中で、彼女はさらた、自由な、主体的な女へと変わつていった。そして、現在、私が目にした、美津さんがいた。「海いっぱい、海であり、空いっぱい、空であるように、私自身、海に生きていたい」、「自分自身に対して、

「とてもステキね」と言える自分でありたいし、みんなにも、そうであってほしい。」と切々と語る美津さんの言葉は、彼女自身が深い痛みの中で、長い間、自虐的で抑圧的な状態をしている中から、自ら主体的に、行動することによって、勝ちえた言葉だからこそ、私の胸をじーんとつつものがあつた。

人の性格というものは、ほぼ生まれてから形作られるという。その半ばは受身的に形作られた性格を自らの力で再び変えていくには、相当莫大なエネルギーが必要だ。そのことを思う時、やはり、美津さんの自己変革は、私にとって、大きな感動を呼ぶおこしげにはいかなかった。



田中美津講演会に行つて

M
Y

田中美津さんの講演、ちよっぴり深刻に、そして大変面白く受けとめました。たまたま「思想の村字」三月号の、再度からだから出発」という彼女の文を読んでいたので、何だかすいぶん親しみを覚え、感じ入った次第です。

日本におけるウーマン・リブ運動のはしりとなつた人といつただけあつて、その内容にはロマンあり、エロスあり、何よりその身体ごとぶつかる情熱に圧倒された思いです。

私もまた、過々去りし学生時代、自己変革をかけた、自立への情熱を燃やした一人であつてみれば、二人の幼き子と夫とのしがらみに縛りつけられた専業主婦としての現在のおのれをふりかえり、彼女のような生き方に、あたら羨望を感じてしまつたのです。

「海いっぱいには海があり、空いっぱいには空がある」。ほんとうにそんな生き方ができればどんなにすてきでしょう。生きていく実感をあからさまに問い続けるウーマン・リブ的な発想に共鳴しつつも、その運動の軌跡には何か複雑

的なものを感じ、はじめないでいる私ですが、たとえば、

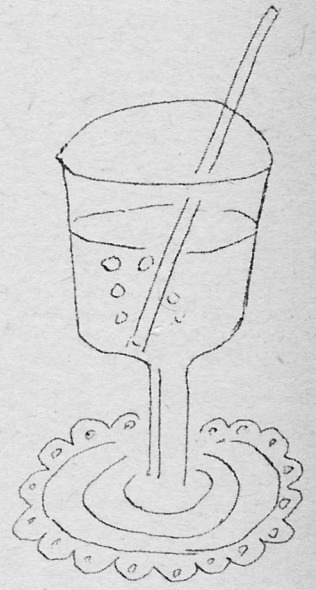
「いい女とは自分が選んだことに対して責任をもつ女であり、責任のとりざまが問題だ」とか、「人間の尊厳にかかわる自立のありよう」を問う彼女の言葉を耳にするとき、その運動の重さど、そこまでいたった苦悩を感じます。ましてや「何ごとも過剰は悪だ」と、そのバランス感覚を強調されたりすると、「瞬おや」と思い、むしろなるほどひとり部屋で何も考えないで雨の音だけをきく時間を持つというのも、ほんといいものだらうなあ」と自分の気負いがふつと抜けるのを感じます。

私のことをいえば、学生時代、経済的自立こそが女性解放への第一歩だ、と唱えていながら、たまたま現在の夫と知り合い、情熱のおもむくまま、ただ一緒に住みたいという思いで、卒業と同時に結婚しました。職業から、離島勤務という長崎県の特殊性ゆえに、共働きをすれば別居を余儀なくされるという事情で、そこまでふみ切れず、そのままずっと七年間、辺地で専業主婦として過ごしています。資格（免許）さえあればそのまま職につくつけると信じ、女性の職場進出、特に既婚の女性のそれが、これほど難し

いものとはそれまで思っていました。結婚した当座は、晴れがましく、職についた友の手紙に後ろめたさを感じて一憂し、長女の誕生にも、喜びよりもわずらわしさが先に立つというような情けない状態でしたが、子どもたちが六才と三才を迎えた今、私のたび重なるヒステリーにもめげず、たくましく育った子らを見るとき、私は子どもたちによつて育てられた自己を感じます。自分は下えず、障害者や老人など弱者の立場に思いをよせている、と思いあがっていた私は、はじめて弱者としてのなま身の子どもたちを前にした時、こなごなに打ちくだかれました。そこでは「たびたび利己的な自分をつきつけられ、子どもたちを対等一人の人格として認めていない自己の姿にあらせんとするのです。それでも子どもたちは、彼女や彼らしく、大らかにたくましく育ち、ひとりの人格として迫ってきます。この先、私

がどのような形で社会的に何らかのかわりを求めて生きていくにしても、閉ざされたように見える私のこの七年間の生活は、また違った形で私の肥料となり得るだろうと、この頃やつといくらか余裕をもつて思えるようになりまし

た。「女から女たちへ」このことばに熱いメッセージをよせているひとりです。



出会い

H・M

「空いっぱいには空であり、海いっぱいには海である」——
田中美津さんが語った時、本当に誰もが、それぞれ異なる
生を十分に生ききれば、それ以上の幸せはないと思えた。
私もこの身から逃れようとせず、精一杯生きればいいん
だと心が軽くなった。——だがしかし、空であることを
喜ばず、海であることを認めたくない私が居る。会場の外
に出て、いつもの私に戻った時、さっきの言葉は私にとって
急によそよそしくなり始めた。だがそれだけだったのか。
田中美津の言葉に私の肩の荷が下りたように感じたことも
事実であった。

講演会の数日後、急な出来事のため福岡に帰った。そこで

は常に目に見えないストレスを感じ、私なりの生き方が、
風船玉が弾むように萎んでしまつたのを感じる。つい先日、
田中美津の言葉から私が受けた「いたわり」とでも形容し
たいようなもの、それによって得た自信、それが全く消え
去つてしまったかの様であった。心も落ちついた今、一フ
一つの言葉は思い出せないが、あの時の私の心の動きを振
り返つてみたい。

彼女の運動の出発点が、歴史を学び社会の矛盾を感じて
云々ではなく、誰もがごく自然に感ずることを行動に移し
たに過ぎないこと、そして、それに自分の痛みを重ね合わ
せて歩いてきた過程だということを知った。運動と名のつ
くものに対し、何らかの接点を感じつつも、社会の構造に
疎い者にはやはり足を踏み入れる場ではないと、とむすれ
ば仰ぎ見がらであったが、今の私そのままでも参加でき
る入場券を持つていることを知らされた。

いつも頭でばかり考え、悩みし、そのうち自分の悩みが
一人よがりのくぐだらないうちに思われて、さらに自信を失
い、自閉症的傾向ありと忠告を受けたことのある私。だが、
その私が考え悩みしてきた中から、うっすらと見えてきた

方向が、身体ごと運動してきた田中美津さんの口から、は

つきりした形をとって出て来た時、それがどういふ言葉であつたか全く思い出せないのだが、それでいいんだよ、みんな同じ様なことで悩み考えしているんだよ、とまるで幼い子がそこに居るといふそれだけで、「いい子だねえ」と頭をなでられた時のような、気恥ずかしい嬉しきで一杯だつた。その一瞬だつたらう、緊張が緩み、涙がにじみ出て来てどうしようもなかつた。へ私は度が過ぎる並ぎ虫で困っている。」

誰もが「何故、私の頭の上だけに、石が落ちてこなければならなかつたのか」といふ憤りを持つてゐるのかもしれない。それは私にもある。美津さんはその石を、もうどけてしまつたのだろうか。それとも、あまり苦にならなくなつたのだろうか。私にはさう感じられて仕方がない。私の石はまだまだ重い。石の種類を恨み、その石の重さを量らうとしたこともある。或る時、その石のことを口に出した時、美津さんが言った様に、後の扉が開つたように感じた。確かに、扉の開く音をこの耳で聞かされた。だが又別の時、扉の後に逆もどりして、生々、葉をばかり帳んてい

る自分を見出す。

紙女の勉強をしている美津さんは、「バランス」という言葉をくり返した。その言葉は私に対して使われているのではないかと思われる程だつた。一つのことばかり考えていると精神がバランスを失い、それが身体にも影響して病気を引き起すとはよく言われることである。心が先か、身体が先か、それは鶏が先か、卵が先かと争う様なものでどちらが先でも構わないが、この二つが密接に関わつてゐることは確かだ。私もどちらが先かはわからないが、どちらもバランスを失つてゐることをひしひしと感ずる。今までは心の方にはかり目を向け、身体に冷淡であつた私。私の生き難さは人一倍身体と密接であるのに。ヨガを勧められやうとその氣になり、ヨガとは調和を意味すると思はされた。身体がバランスを持ち始めることで心もバランスをとりに戻せるかもしれない。時には扉の後に逆もどりし、とり乱すことがあつても頭の上の石と伴に少しでも気楽に行けたらと思つ。同じ九州の福岡から長崎に、距離も大して遠くないが私にとっては新しい地。無理して自分を引張り出し、女の会に入り、そして、田中美津に出会つた。

幻想からの脱出

H・H

私にとって、今回の田中美津さんとの出会いは、予想していた以上に大きなものだった。

「いのちの女たちへ」を読んだ時、なぜこんなにもスッキリと生きられるのだろうか、としまきりに思った。講義の間にゆう、そのことが頭から離れなかつた。言葉を尽くして、相手にわかってもらおうとする話し方はなかつただけに、正直なところ、圧倒され混乱した。

数日後、やっと自分の感じたものが形を成してきた。私は一体、誰の人生を生きているのか？ 自分の空、自分の海を、はつきり意識したことがあったのか？

毎日の生活の中で、今一番ひっかかっているのは夫との関係である。結婚する前までは、両親との関係であった。自分自身の生き方よりも、あくまで関係が中心だった。

小学三年生頃のこと、みじめな状態にあった両親の唯一の希望は、私の成績らしいと感じた。両親の期待はたどたどりのが、私にとって一番価値あることになり、注意の価値とも一致していた。それによって、両親の期待はなかつた。

この人と一緒に暮らしたいと燃えていた時も、両親と一緒に住み経済的にも支えてやらねばと、跡とり娘としての思いは消えなかつた。両親を重荷と感じ続けつつ、自分の役割に満足していた。だが人恋いしきに耐えきれず、二十九才で結婚して、出来ないことは出来ない、と初めてわかった。自分の人生なんだ、とフッきたつもりだった。そして、今また、夫との関係で、なぜわかつてくれないんだ、私の立場も認められ、とイラだっている。

両親とのことと夫とのこと、形の上では違ふように見え、実は同じ根っこから出ているのではないか。夫に対して、結局これはあなたの為なんだと言いつつ、自分の思い通りにならないと逆恨みしてただけではないか。自己嫌悪という甘美な幻想に没りきっていたのではないか。自分自身の生き難さを、本当に真正面から見ずえていたのか。

田中美津さんのようにスッキリとはいかないだろう。両親のことも夫のことも、おっとどこまでも引きずって生きていくだろう。しかし、他人の人生の中に自分の人生を見ることが、脱け出せそうな気がする。

講演雑感

〇・C

講演を全部聞いていないのにへ保育担当だったため、感想を書けと言われ、実のところ少し困っています。それでもまあ印象といった、断片的な、ある意味では独断になりそうですけど、そういったものを書いてみたいと思います。

へ田中美津さんという人について

非常にナイーブな傷つき易い人、自分に正直で捨身な生き方をした人という印象を受けました。それにしても不器用で、あちこちぶつかりながら必死で生きてきた田中さんの生き方は、私も、どちらかと言えば不器用な範ちゅうの人向なので、共感を覚えると共に、もう少し素直に、高ひじ張らずに生きられれば良かったのにと、日本のような閉鎖社会では、言ってみても仕方の無いことですが、若干痛々しいという気もしました。

へ講演で考えさせられたこと、気がついたこと

講演の中で、異和感を持った言葉に「強い男が好きだ」という言葉があります。私は優しい男が好きなので、この

言葉を聞いた時、私とは違うんだと感じたのです。しかし

私は、多分着在意識の中に「強い男が好きだ」という自分がいることも感じています。けれど、それは生活の知恵、ある意味ではするさですが、そんなものから言わない方が良いと思っていますのです。そういう自分がいることを「自分の限界」だとも感じてはいるのです。私は日常の積み重ねの中から、何かは育っていないという立場を取っている者ですから、「取り乱させてくれる男が良い」とは、現在のところ、言えないのです。そして、できるだけ、そういう立場を取り続けていきたいと考えているのです。そして、この田中さんの言葉を聞いた時、「男と女の向には深く暗い河がある」という例の歌を思い出し、私は結婚生活を続け、田中さんは、未婚の母になったという分岐点で、ぼんやりと解ったような気がしました。それから先は、芸術や宗教の課題のように思います。

もう一つ、やはり、幾分異和感を覚えた言葉に「有名な

を呼んできたり、有名な主体の運動はできるだけ止めた方が

良い」というのがあります。その言葉を聞いた時、田中

さんという人は、運動の力学というか、ダイナミズムとい

うか、そんなものを知らない人なのではないかと思いまし

た。有名人というところにうられずに、女の念は、もっと
柔軟に、戦術戦術をわきまえて運動していったら良いと思
います。

そして、次のことが一番重要なのですが、田中さんが東
洋思想に牽かれるのは、今までの生の軌跡からして当然で
すが、やはり、そこにどどまって欲しくないと思いました。
もら論、自分でも「生きていくことは弁証法だ」と言われ
ていたし、そんなことは無いと思いますが……

東洋思想に回歸する時（東洋思想の何たるかを、よくわ
かっていませんが）私には、個の存亡命は生きても、全
体としての時代の動きは見えにくくなるのではないかと
いう気がするのです。アコラの斎藤千代さんが、「共に生
きる」ことがフェミニズムの運動だと書いていました。私
は、とても重い言葉だと思えます。東洋思想では「共に」
は出てくるが、「生きる」は西洋流の抱擁するといつか、
運動するといつか、まあそんな考え方から出て来ると思え
るのです。自己の肯定と、自己の否定と、二本の柱を持ち
、「他を踏みつけにしない」「他から踏まれない」ように
生きていきたいと、考えるのです。あまり偉そうなお口はき

けませんが……、それでも田中さんと、「共に生きていき
たいと思います。

入田中さんの歌「バワフル・ウイメンズ・スルース」

の二とく

この歌をうたっている田中さんは、とても素敵でした。
この歌自体は、会場で唄っている時はあまり良いと思わな
かったのが、つい先日、嫌なことがあった時、一人で風呂
の中で歌っていたら、妙に元気が出てきました。それ以来
とても好きです。自分を元気づけ、はげますのに良い歌で
す。誰も、きつい辛いことがあるのね、といった感じで
、また頑張ってみようかという気になります。

私も、できるだけ自分の歌を作りたい、という気にな
りました。皆がそれぞれ自分の歌を持つというのは、考
えてみると、とても素敵なことだと思えますが……

*

*

*

「二つの本音」

M・J

田中美津さんは、講演会と前後三回の方流会を「二つの本音」という言葉と、「悪徳」という言葉を、私たちへの警告も含めてプレゼントしてくれたと思いました。

「海いっばいの海」「空いっばいの空」というイメージも、そういう生々しい人間という存在のままに、いっばいに「生きる」という、かぎりない人間へのいとおしさがこめられているように思いました。

× × × × ×

「二つの本音」ということを田中さんは、家事や育児も分担してやる、やさしい男そいけど、そんな事には全く頓着しない「男らしい男」にはもっと魅かれる、という風に言いました。私も内心、そうなんだなあ、とため息まじりに同感。……本当にそうなのです。男のことにかぎらず、あらゆることが全てそういう具合になっているのが、生きている人間の状態なのです。本当のことを言いあてられて、フッと肩の張りがとれたのです。

ところで、田中さんの言う「やさしい男」本当にやさし

いとは思わない」と同居している私としては、肩の張りはとれたけれど、モヤモヤはしだいに濃くなってきているだけです。家事や育児は分担するけれど、その分だけ（？）働きをなくしているように見える我が連れ合いも含めた男たち。時には「家事育児なんぞどうだっていいのよ、やりたけりゃやっせう」とハッパをかけても、「……」と返事がなく、「一体、何をやりたいの？」とすめおると、「権力が親みたいなのを言うな」とすこし剣幕。たしかに「何をやりたいの」と言われても、私にも答えられないけれど、そう決定的なことではなくても何か言えることがあるでしょう。今のところ、こういう所が問題だとか……。と水を向けても「俺にとつては、そんな事ではすまされない」とくる。男にとつては相愛らず、自らの現業から全生界を把握し、体系づけなければ、一言も発せないという「男らしい思考」のパターン、価値の体系は、他にゆずることの出来ない強さなのでしょうか。

田中さんに会う前に、ちよつとそんな話をしていた私は彼女の「二つの本音」の語にひどくひっかかって、私の場合はどうなのか、と考えずにはいられませんでした。私も

「男らしい男」がいいのです。そして、今までめぐり合った男で一番男らしい男だったのが、現在同居中の男なのですが……。よく考えてみると、それまで出会った男たちが何かという私に忠告を与えたり、力を借したことがたりするタイプで、自分の意志とは関係なく私のイメージがふくらまされる感じでした。まわらなくわらわしかったのです。その上、事もあろうに「君なしでは生きられない」とささやかれては、もう、男というものに絶望する以外になかったのです。

そこへあらわれたのが現在の男で、彼は、それらの一切のことを全くしない人物だったのです。彼は彼であり、私は私でした。だから、私にとって彼が魅力的だったのは、がむしゃらな生命力と決して自分をゆすらないという潔さ、また、みたり女ものだったのです。ただそれだけのことなのに、私は、私と全くちがう存在としての男に、めぐりあったとかんじたのです。その存在は、まさに輝いてみえたのです。こうした感じ方の中には、当時の私がいかに感情的で気分が起伏がはげしく、いつも死と隣り合わせに居るような状態だったことも反映していると思いますが……。

同居をはじめた九年。男は出口を喪失して、深い闇の中に落ちるように寝てます。廻ける生命力をうばったものは、共同生活という自覚、たえまないお互いの衝突だったことはたしかです。同居をはじめた頃、男と話したことがありません。男と女がお互いを意識し合って生活するってことは、一人の力が半分以下になって、二人分を合わせても一人前以下になるってことなんだなあ。割りの悪い生きえなんだなあ。でも、それが分かっている、私たちはこの方法を避けたのです。そのくせ今、男が夜おきていると、どうしても自分の思考が進まなくて、相手が気になっちゃいます。私は、時々、もう一部屋どこかに部屋借りたいなあ、と切実に思うことがあります。子供も男も居ない自分の自由な世界を空間としても持つたいと。

「二つの本音」という言葉は、自分自身を「こうあるべき」という方向に追いつめて生きていくなということであり、二つの欲求の間に自ら立ちながら、その揺れを確かめながら自分に正直に生きよ、ということであり、美穂人間に二り固まって生命力を失なうなという警告であったと思っっています。……私も行けるところまで行くしかありません。

田中美津の話をきいて

W・Y

落語をきくように面白い話でした。いい話する人で成甲
だったと思います。

あとに残ったものは、フラストレーション。

自分の話をしていない、いかく自分をおとしめず、売り
込むか、尻と鬼います。メキシコに行くのもいい、でも
行ってそんなふっしになる男がいたなら、なぜ日本にまた
まいもどったのか、不思議です。女も男もなれと思います。
自分を充実させるならその時を充実させるしかないだろう
し、それならなせ男と別れて日本にまた来たのかと不思議です。
自分のことを全部さらけださないとしても、ロカした話
なりいるのではないのでしょうか。

以前ケルレーと蘭の女のピラを讀み話をきいて、おもしろ
いなと思っただけ、失望はなかったです。

本書でもない本書を言ひ、自分はカンバンタという話を
スギ、自分の性質とこの話をばぐらかこれ、一流の
アシテーターとはそんなに自分可愛いいものなのかとい
うしうけに自分を在せ保るさもって帰りました。

私自身は、主婦でタンスのかせきを食って、適当に歩

いています。自分の知性もたないし、平塚らいてうが
すてきだとも思いません。何んと言われたいもいいし、言わ
れたいと思っっています。でも、主婦でもなく、未婚の女と
つづばるでもなく、女一人でつづばっているでもなく
孝世離れした一人の女史を見るのは、懐立ちです。男持っ
の女と男を持たない女の確執が必要なのではないかと思っ
ています。女と言いながら男を一般論で言いきあがらせるの
はママードではないかと思っています。女と言うからには男
があり、男の形而下の女を立てるなら、徹底的に形
而下に二つわり、いさめるしかないと思えます。それをせ
ずに、永田洋子はイマリニアをしていい女だったとか、女意
識だけで裁断するのは、拒否したいと思えます。男をぬき
たしての女による女のあわれみ、男があるから女という言
葉があるのです。男をぬきくするなら、総合的にとらえま
から言うべきです。

マスコミをあれだけ利用しようとして田中美津、どうい
う面も、もったいなく多言すべきです。利用するのは悪く
ないけれど、そんな組織者としてあったのだと思つから言

うのですが、自分一人の事として言うのははなはだ、社会的な活動家として、はっきりした立場をとってほしいかっつと思えます。

私のももちは、「私と彼女は違う、女ウーマンリアを批判する人間がいたら、自分は必死でウーマンリアの味方をする」と言っていていい。田中美津は、彼女に對等に言えるだけの対社会性、女同志のやまこももっているのではありません。かっつんな絆をもってこそ、個人をのりこえるエネルギーがでてくるのではないのでしょうか？



講義にマ

空いっぱい生き、海いっぱい生きしてほしい。つまり、生ある限り、カいっぱい燃焼し尽くして生きてほしい、というテーマで、田中さん自身が生きてきた過程を話されました。

田中美津さんは、七才の時受けた傷（決して全く嫌いでなかった）、一部受け入れた気持ちがあった（女としての商品価値を値引かれた商品ではない）ことで、長い間悩み苦しんだ。この事が、田中美津さんの生きていくうえでの基礎となっており、田中美津さんの人格形成に影響していると言つてよいかと思います。

誰かが投じた石が、たまたま田中さんの頭に落ちてきた。ベトナム戦争孤児も同様で、たまたま両親が戦争のそばで死亡、孤児になってしまっただけで、本人のあずかり知らぬ不幸な出来事です。田中さんにとって、幼児体験とベトナム戦争孤児救援活動とは、全く同一線上のものであった。

偶然の出来事が、当事者にとって非に深刻は問題となつていくという思いは、誰もが経験していることではない

A・K

でしようか。

例へば、性別・門地、容姿の問題などは主なもの、本人が愛欲にはいかなない。男は女が、又支配者階級が被支配者階級の、または美しい醜いかは、本人の操り知りぬ。たまたまとちらがに生れついでに過ぎない。

そしてまた、先天的なラス後天的な職業が加わることでその個性となつて表われる。後天的なもの、その人をとりまく環境、社会、地域、学校、友人関係、マスコミ等があげられると思う。私たちは二つの環境の中で、どうしたら快適な人生を送られるかと一生けん命探求しつつ生きていきます。

田中さんは、中産階級出身で経済的に困らないが、幼児体験に続き、ベトナム孤児救済活動、そして東大紛争を皮切りに、それに続く学生運動を通じて女の問題を考へ出したとの事の様である。

私は貧困(労働者階級で同僚大人)と容姿について長く悩み、今の高、中学生のように、人生設計は結婚までしかなかった。私のように自信喪失の女と結婚する男がいるのかしらと考へていた。くもかがわらず、二十一才で結婚。

結婚後、女の問題を「女はどうしてこら扱は役自ばかり

引き受けるのだから」という形で考へるようになった。でもこの時は私が扱はなければいいと思つただけで、女全体が扱はるとは知りつづも、女全体の問題とは考へなかつた。二十才才後から労働組合の役員になり、女が社会的に置かれていゝ立場が分かつて来て女の会に入つたのですけど

その時その時を一生けん命生きてかと思われると、そつじマなかつたと思う。常に同僚から逃げ場を持って、組合に入り、女の問題に悩んで来た。とはいつても、子供を抱えて組合に、職場に、女の会にと、私にとってフル回転してゐるのですが、中途半端なことを終つていゝと思へない。

田中さんは、その時その時を確か、精一がい生きてると思つた。子育てをどうしてみても、徹底して子供につきあつていゝ。山川昌子さんも、全生活を子供とつき合ふことになつたと言つていた。空いっばい生きていゝ。何もかも投げ捨て、一つのことだけ、ことばつかることだとは判かつていても、それが私には出来ない。

私にとっての問題は一つ、容姿の問題は、もう何年も前だから、切れた。貧困については私に私につきまとい

る。いつもワイフの味とくらめっこ。

田中さんのように子育ての尺めなら生活保護を利用する
まで徹底して生きてもいいが、私達は結婚しても、子供
が出来ても働きながら何かを求めて生きていと、欲はった
生活をしている。だから私は焦臭が定まらず迷いはかり多
くて困る。働くことを捨て切れない私は、やはり貧困と抱
き合って生きていくのだという思いに至りました。

「交流討論会のお知らせ」

七月四日(土) 六時半より

八深堀、村自宅にて

七月二十五日(土) 六時半より

八浦上、栗山宅にて

おんぞいあわせの上
多数参加下さい

「女の会通信」編集委員会よりお願い

六月七日の購読会では、多数の方が来てくださって
ありがとございました。女の会ではこの「女の
会通信」を毎日一回、発行しています。

あな方も、ぜひ、「女の会通信」の購読者になつて
下さい。

購読料は一月間 一十円です。

購読者になつて下さる方は、編集委員会(中園町四の
十七 山田善子 TEL 44の8842)へ御一報下
さい。